

15 「対話的な学び」を視点とした授業改善の実践



👉 こんな実践

泳力差のある子供を意図的に混在させたグループ対抗戦にすることで、仲間同士で動きを観察し合いながら課題を見付け、解決しながら手や足の動きに呼吸を合わせて続けて長く泳ぐ伸びを自覚できることを目指した実践です。

実践学校 Y学校

実践学年 6学年

実践時期 7月中旬

単元名 「平泳ぎかきけりカップ」

学習指導要領との関連： D 水泳運動 (1)イ (2)

○ 対話的な学びを生むための授業改善の視点と工夫

水泳学習事前質問紙では、スイミングスクールに通う子供が多く、学級の30%の子供がクロール、平泳ぎで100m程度を泳ぐ技能を習得していました。一方で、「泳ぎ方がわからないから水泳が苦手」と回答した子供も学級の30%存在していて、「長い距離が泳げないから」と、その理由を挙げていました。この実態を受け、一人4ストロークだけに限定し、その合計距離で競うグループ(1グループ3人)対抗戦を取り入れました。その中で、プル・キック・姿勢・コンビネーションを仲間同士で観察し、改善点を見つけ、アドバイスするといった対話的な学びになるような単元展開を構想しました。また、1ストロークを伸長することが、速く、長く泳ぐためには必要であることを理解し、これまでの、泳げる距離やタイムだけではなく、それまでの過程を大切にし、泳ぎの得意な子供と苦手な子供が共に関わり、全員が伸びを自覚できる授業を目指しました。

○ 自己課題を他者との対話で解決していく姿

第3時、Aさんは、休み時間に本で調べた泳ぎ方のコツや、友達から聞いたコツをもとに、イメージをもって泳いでみましたが、前時と同じで体が沈んでしまいました。そんな中、同メンバーのBさんとCさんは、Aさんの動きを水中で観察し、イメージした蹴り方と、Aさんの足の形に違いがあることを見つけました。

3人で話し合った後、グループ内の経験者に手で足を動かしてもらいながら蹴り方のアドバイスをもらいました。コツがわかると、ビート板を使って何度も蹴って進むことを楽しみました。Aさんは、授業の振り返りを以下のように記述しました。

僕ができなかった原因は、やはり膝が閉じていたことや足首が内側に向いていたことだった。友達に足を持ってもらったら、膝を開くことがわかった。そして、僕は足首が硬いから、お風呂からでたらストレッチをすればいいと聞いた。

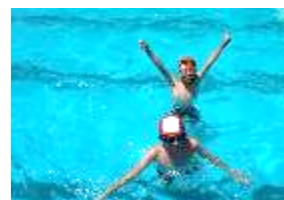
第4時、Aさんは活動開始後、プールサイドに立ってCさんの足の動きを観察していました。そして、蹴る時に水しぶきが上がることを見つけ、Cさんの足首が内側に向いていること、つまり自分と同じつまずきをしていたことに気がきました。Aさんは、Cさんに自分の足首を見せながら、自分が見つけたコツを熱心に伝えていました。



第5時、共通の課題の1つである、「平泳ぎで一番進む時はいつ？」を問うた後、お手本となった子供の泳ぎをプールサイドから観察するよう促しました。その泳ぎを見たCさんは、ストローク後に体が一度沈み、ストロークをせずに伸びることで体が浮いてくることに気がきました。そして、「伸びる時」の時間を十分にとって泳ぐ良さをCさんから聞いたAさんは、タブレットで自分の伸びる様子を撮影してもらいながら何度も伸びる練習を重ねました。



単元の終末のチャレンジタイムでは、4ストロークの計測を5mから14mに伸ばしました。そして、2回目のチャレンジでは、4ストロークでやめるはずが、なんとそのまま25mを折り返して50mを泳ぎ切り、3人でガッツポーズする姿が見られました。



ここがポイント！

- ・仲間同士で動きを観察して修正点を伝え合えるようにすることが大切です。また、追究の場面では、「見合う視点」を明確にして観察させることが大切です。

まとめ

- ・個々の課題を仲間同士で観察し合いながら追究できるように、少人数のグループ学習としたことで、自己や仲間の考えたことを他者に伝え、協働して課題解決することになり、手や足の動きに呼吸を合わせて続けて長く泳ぐことの行い方を理解するとともに、その技能を身に付けるといった、水泳運動における資質・能力を育むことにつながりました。